

一心寺かわら版

第九号 平成十九年一月発行

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。旧年中はご助力いただき誠に有難うございました。本年も御同朋として、ともにお念仏を称え浄土の道を歩ませていただきましょう。みなさまのご多幸とご健勝を念じ上げます。

「若不生者 不取正覚

—あなたの喜びが私の喜びです— (季平博昭師)

今年の仏教青年会柱掛け法語です。「若不生者不取正覚」(にやくふしようじゃ・ふしゆしようがく)とは『仏説無量寿経』の第十八願にある言葉です。「あなたがもし浄土に生まれなければ、私(阿弥陀仏)は仏(さとり)の境地)にはならない」と誓われています。これが仏の心であり、以前にもお話した「同体大悲」です。季平師はそれを訳して「あなたの喜びが私の喜びです」とあらわしています。

「喜び」が生まれるのはどういう時でしょうか、それは「満足」した時ではないでしょうか。私たちは大抵「不足」を感じながら生きています。その不足ある私が満たされる時、それは私に対す

る「願い」、「思い」が感じられた時ではないでしょうか。

私の身になって気持ちを感じ尊重してくれる、私の幸せを願い続けてくれる、その思い、願いによって心が満たされていく。そうして満たされた私から今度は、自然と他に対する思いやりの心が湧き出てくるのでしょうか。

自分の悲しく苦しい思いを分かってもらえたと、心が暖かくなって元気が出てくるという経験をすることはないでしょうか。

幼い頃の思い出ですが、私は逆上がりができませんでした。放課後に居残り練習させられるのですが、それが一人ぼっちだったらどれほど辛かったでしょうか。他にも私と同じく苦手な人がおり、苦しみを分かり合えるものがあることで、そんなに苦にはならなかったように思います。



また私は幼い頃、甘栗が大好きでした。当時は今のようにはコンビンでいつでも買えるというようなものではなく、秋祭りの時ぐらいしか食べることができませんでした。その甘栗を人数分に分けるのは私の役割でした。私は甘栗が大好きでしたから、大きいもの、おいしそうなものが欲しいのですが、できる限り均等になるように心掛けます。均等に分けることができたなら両親や祖母に、「上手にできたな、みんな喜ぶよ」と褒められ、みんなでおいしくいただいたものです。

こういう経験が大切なのだと今になって思います。私の苦しみ

を理解してくれる人がいる、私が独り占めしたら他の人が悲しむ、そういうことを身を感じる事ができたら、自然に悲しみや喜びをみんなと分かち合うようになっていく。そうして思いやりの心が育っていくのでしょう。



お参りをさせていただくと、「お経さんが仏さまの一番のごちそうや」、「院主さんにお勤めしてもらって仏さまが喜んでいます」とおっしゃってくださる方がいらっしやいまして、常々うれしく思っています。

しかし私たちは、先人がそう言い伝えてきた心を正しく受け継いでいるでしょうか。浄土真宗では、読経がそのまま仏さまのためになる、仏さまの喜びになるというわけではありません。では先人はどういう気持ちで、このように言い伝えてきたのでしょうか。

それはこの四十八願の心、「あなたの喜びが私の喜びです」という仏心にあります。よく子や孫に対する親や祖父母の心として、「親孝行といっても特別何もしてくれんでもええ、お前が元気で幸せでいてくれることが一番の親孝行や」ということを聞きます。これと同じく仏さまは、私が喜びに満ちていること、浄土真宗のことばであらわせば、浄土に往生する人生を送ることを喜んでくださるのです。浄土とは私にはたらきかけている仏心の世界、

かぎりないのちの願いの世界です。そのいのちの支えに目覚めることによつて手が合わさっていく、煩惱を抱えながらも感謝と思いやりの心が生まれてきます。

つまり、私がお経をいただき念仏を称え浄土に生まれゆくことが、言うなれば「仏さま孝行」となるのです。

季平師は「ご本願とは究極の思いやりのはたらきである」とおっしゃいます。私というのちは、「あなたの喜びが私の喜びである」という仏さまのふところの中で生きているということ、それに気付き感謝とともに勤められる法事に集う人々の姿に出遇って、仏さまが微笑んでいらっしやることでしよう。

眞宗仏事について⑥法事

法事はさまざまな節目、一周忌〜三回忌
〜七回忌〜十三回忌〜十七回忌〜二十五
回忌〜三十三回忌〜五十回忌〜百回忌〜
以後五十年毎というように勤められます。
年忌は、一周忌以外は亡くなった年を入れ
ての年数になり、勤める回忌は地方や宗旨
によつて少々異なるようです。また祥月命日として毎年お勤めを
するところもあります。本来法事とは、〇回忌だから勤めなくて
はならないが、他の年は勤めなくてよいというものではなく、で
きる限り勤めさせていただくべきものです。「忌」という語には、



「慎む」という意味があります。つまり法事以外のことを慎む、法事に専念する、それほど大切であるということでしょう。法事の日取りを命日より先に伸ばすのはいけないといわれることがあります。これも大切な法事を後回しにすることを戒める意味合いです。もちろんご命日に勤めることができれば良いのですが、現実的には難しいようです。法事はできる限り多くの人が法を聴聞し、お念仏することが最も大切ですから、縁のある人が集まることができる時に勤め、ご命日は別に近親者のみでもお勤めすれば良いでしょう。一人一人が故人を偲び、浄土に生まれるみ教えをいただく法事、それが阿弥陀仏をはじめとする仏さまの徳を讃えること、敬いとなるのです。

お経ってなあに？⑥念仏・和讃

法事では伽陀（かだ）、表白（ひょうびやく）、お経や正信偈などの正宗分（しょうしゅうぶん）に続いて「念仏」が称えられます。浄土真宗の念仏はもちろん「南無阿弥陀仏」ですが、法事ではそれ以外にもさまざまな念仏が称えられます。例えば『仏説無量寿経』にある、阿弥陀仏の光明を譬えた十二光仏を称えたり、また阿弥陀仏の脇侍菩薩である大勢至菩薩、観世音菩薩の名とともに称えられた



りもします。また「南無阿弥陀仏」にさまざまな節を付けて称えることもあります。

念仏に続いては、多くの場合「和讃」があげられます。親鸞聖人当時は、正式な文章は漢文で書かれていたので非常に難しかったようです。「正信偈」がある『教行信証』もそうです。和讃は南無阿弥陀仏のみ教えを私たちに分かりやすく伝えるために、親鸞聖人が仮名混じりの文章で著されたお聖教で、約五百首あります。一般に「正信偈」は、念仏と六首の和讃とともに読誦されます。また独特の節回しによって「南無阿弥陀仏をとなふれば」と繰り返される現世利益和讃や、「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし」という恩徳讃は耳に残っているのではないのでしょうか。

